

報道機関 各位

「ぎふまちづくりTTP大賞2024」表彰式&交流会を開催！

※TTPとは「徹底的にパくる」の略で、いいことを真似するという意味です

「ぎふまちづくりTTP大賞」とは、岐阜で真似したいまちづくりの仕組みや工夫を勝手に表彰するものです。表彰された事例は、誰でも真似して大丈夫とし、真似して自分たちの住むまちを良くすることを促進するものです。この賞は2018年度から始めており今回で7回目を迎えます。

今年度は、岐阜大学地域マネジメント研究室の学生10名(社会システム経営学環8名+社会基盤工学科2名)が中心となって18団体を取り上げ、その中から実行委員会にて5団体を候補として選考しました。その後、現地を訪問するなどしてインタビューや調査を行い、最終的に実行委員会にて4団体を大賞として選考しました。

「ぎふまちづくりTTP大賞2024」表彰式&交流会では、学生が作成したポスターを会場に掲示し、学生によるTTPのポイントの発表、表彰団体からのコメント、参加団体間および実行委員会との交流会を行います。

つきましては、取材について、よろしくお取り計らい願います。

1. 日 時:令和7年3月16日(日)10:00~12:00(10:00 表彰式、11:00 交流会)

2. 場 所:岐阜大学工学部多目的教育研究棟 T101

3. 内 容:学生によるTTPポイントの発表、表彰式、記念写真撮影、交流会

4. 表彰団体: ・高山まちづくり防災女子会(高山市)

「仲のいい防災女子が得意な分野を活かして『楽しく』活動」

・市民活動団体わいわい(飛騨市)

「地域に眠っている保健人材を発掘し、地域住民の健康を支える」

・大杉 MTB トレイルパーク(関市)

「財産区の可能性! ?趣味コミュニティで維持管理/活用する」

・フェニックスグループ(各務原市)

「『楽しそう』でつながりの輪をひろげる『GOZARE』プロジェクト」

5. 実施団体:ぎふまちづくりTTP大賞実行委員会

岐阜大学教授 高木朗義・朝日大学教授 大野正博・コピーライター 船戸梨恵・

一般社団法人 Do It Yourself 東善朗・後藤博

岐阜大学生 河合穂香・近藤綾香・鈴木琴和・松本理沙・田中昀・山口薫・

糟谷天音・金丸勇志・田谷ひなの・丹羽亮太

6. 学生が作成したポスター(別紙参照)

問い合わせ先

岐阜大学 社会システム経営学環 教授 高木朗義

TEL:058-293-2445(080-5125-3390)

E-mail:takagi.akiyoshi.d6@f.gifu-u.ac.jp

Press Release

※岐阜大学工学部多目的教育研究棟 T101 の案内図



本件は「ぎふのミ・ラ・イ・エ」構想のうち下記を推進するものです。



「ぎふのミ・ラ・イ・エ」構想:

https://www.gifu-u.ac.jp/about/aims/gifu_miraie.html



岐阜大学は国立大学法人東海国立大学機構が運営する国立大学です。

MAKE NEW STANDARDS.



東海国立大学機構 HP: <https://www.thers.ac.jp/>

地域に眠っている保健人材を発掘し、地域住民の健康を支える



団体HP

【活動概要・他にもありそうな課題】

《活動》

看護師や介護士がボランティアで「まちの保健室」の運営

- － 血圧測定、健康相談、介護予防のアドバイス、心配ごとの相談
- － 必要なときに、必要なところ(病院、市役所、その他)に繋ぐ

《課題》

- ・ 飛騨地域の高齢化に伴う孤独、病院は忙しそうで相談できない
 - ・ 核家族化によって育児を頼れる人がいない
- ⇒ **居場所づくり**、健康について気軽に**相談できる場所**を目指す



【マネできそうな手順や実例】

地域にいる潜在的な資格保有者を仲間にする！

《手順》

① 団体の立ち上げ

≫ 自分の持っている資格やスキルを活かしたいという仲間と共に、まずは**始めてみる**！

② 仲間を集める

≫ インスタグラムやフェイスブックなどの**SNS**で仲間を集める！ **ハッシュタグ**を忘れずに！

③ イベント、交流会の開催

≫ 血圧測定や健康相談、それぞれの**資格や専門**を活かしたワークショップの開催

《実例》「まちの保健室」の開催

≫ 血圧測定や健康相談をしながらおしゃべりすることで、地域の人との交流の場になっている。さまざまな不安や悩みを看護師に気軽に相談できる。まさに「保健室」のような場所づくり。



《実例》ワークショップの開催

≫ それぞれの資格を活かしたワークショップや体験会を行うことで、地域の健康意識の向上や健康増進を図る。実施者にとっては地域での活躍の場となっている。

↓ リラクスティアヨガ



↓ 足と靴の相談室



【獲得できた効果】

《実施者から見た効果》

- ・ 今まで使えていなかった資格を活かすことができる。
- ・ 資格やスキルなどを新たな形で活用することができる。
- ・ それぞれのライフスタイルに合わせながら、地域で活躍するきっかけとなる。
- ・ 活躍の場を提供することで、それぞれの強みを活かした地域づくり・生きがいづくりを行うことができる。

《住民・市民から見た効果》

- ・ 病院に行かずとも悩みを相談することができる。
- ・ 悩みの種類や深刻さにかかわらず話を聞いてもらえる。
- ・ 血圧測定などの健康習慣が身につく。
- ・ 高齢者が自宅から出るきっかけとなり、ひきこもりを防ぐことができる。
- ・ 人との交流が生まれ、孤独感の解消になる。

財産区の可能性！？趣味コミュニティで維持管理/活用する

【活動概要・他にもありそうな課題】

《活動》

地域の財産区である森林資源を活用したマウンテンバイク専用コースの整備・運営を通じ、地域活性化と森林の維持管理を行う。また、初心者や子どもでも安心してマウンテンバイクを楽しめる場の提供を目指している。

《課題》

行政によって整備された財産区の維持管理を自治会が担わなければならないが、人口減少や高齢化の進行により、自治会だけでこれを十分に維持するのが難しくなっている。そのような背景から一度行政により整備された財産区が放置されてもとに戻ってしまうといった事態が相次いでいるといった現状がある。



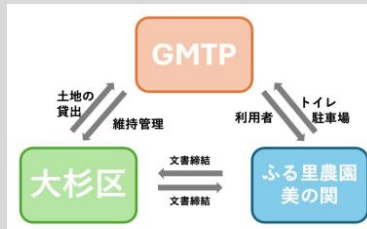
【マネできそうな手順や事例】

財産区×趣味コミュニティで維持管理/活用する

MTB（マウンテンバイク）愛好者の団体が、財産区を自治会から無償で貸し出してもらい、コースの整備や管理に直接関わることで、自治会に負担をかけることなく、土地の有効活用を実現している。財産区の維持管理や自治会とのやり取りに関するTTPポイントと手順を示す。

実際の組織図

右図の3者間で協定を結んでいる



《手順》

①自治会が財産区の活用を呼びかけ、趣味コミュニティとマッチングする

※この際、自治会長が変わっても運営できるよう第三者も巻き込んで文章として締結書を交わす

②趣味コミュニティが整備された財産区の維持・管理を行う

※活用したい方法に合わせて財産区を管理できるよう利用可能な状態になるよう手を加える

～大杉MTBの運営方法について～

大杉MTBでは、有志ボランティアによって10個のコースを整備。運営資金は、訪れた人からの寄付金と自転車ショップからの寄付金により賄う。悪天候の日を除いて日中は常に解放されているが、ボランティアスタッフは常に常駐しているわけではない。

大杉MTBトレイルパーク コースMAP



ポイント

・対象者（ターゲット）を明確にした施設運営を行う

※対象者を広げすぎると運営が複雑化するため、長期間にわたって運営できるよう対象者を絞る

・補助金は使わない

※申請が大変であったり、使える用途が長続きしない等の問題が起るため、寄付金なしで運用できる体制で施設を運用する

ボランティアのルール

- ①ボランティアスタッフも楽しめる環境、体制づくり
- ②当番制はなし
できる人ができることをできるタイミングで行い、無理はしない
- ③情報はみんなで共有（SNS）、やりたいことはみんなで相談
- ④「MTBの初心者のために」という目的を見失わない

【獲得できた効果】

《自治会から見た効果》

➢ 自治会の負担減

自治会が手をかけることなく、財産区の維持管理の問題を解決している。

➢ 周辺地域も含めた活性化

MTBトレイルでは、2024年8月時点で20,000人の来場者数を達成しており、ふる里農園を含め大杉区にくる来訪者が増加している。

《実施者から見た効果》

➢ マウンテンバイクを楽しめる場所

マウンテンバイクが好きな人が手軽にだれでも、いつでも、気軽に遊べる場所を、アクセスが良い関市で運営できている。

➢ やりたいことに挑戦できる環境

土地代がかからないため、運用資金が少なく済むことや、農園のトイレを利用することでトイレの問題がないことから、自分たちがやりたいことに専念できる環境がある。

「楽しそう」でつながりの輪をひろげる「GOZARE」プロジェクト

【活動概要・他でもありそうな課題】

《活動》

- ・患者が治療を終えた後も、地域でイキイキと過ごせるよう、子どもから高齢者まで、障がいの有無にかかわらず、誰もが安心してつながり合える「誰でも“ゴザーレ”な地域共生社会」を目指している。
- ・その一環として**楽しみながら地域課題解決につながる**イベントを企画・開催している。

《課題》

- 子ども・障害を持つ人・お年寄りが**イキイキと活動できる**場所がない。
- 地域課題解決に取り組む人は、まちづくりに関心がある人しかいない。
- 地域住民を巻き込みながら、**地域課題に向きあう**企業が少ない。



【マネできそうな手順や実例】

「楽しそう」が人を呼び、新たな地域活動の担い手とのつながりの輪が生まれる

《手順》

- ① 2か月に1回、「楽しそう」なイベントを開催して、年齢や障がいの有無に関わらず多くの人を巻き込む。
- ② イベントが人と人とを自由につなげる「マッチング」の場となる。
- ③ 人それぞれの「できること」がつながり、新たな「できること」が生まれる。

《マネポイント》

- ・ 多くの人々が「参加したい！」と思う**定期的なイベント**の企画
- ・ イベントを「マッチング」の場として捉え、地域住民や地域課題を知るきっかけを提供している。

《実例》

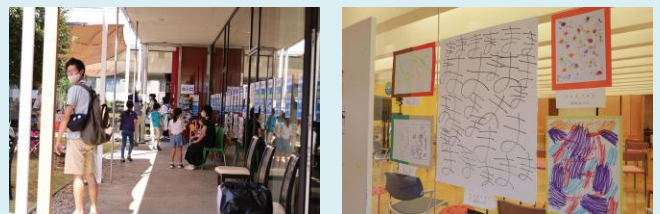
4月 GOZAREの杜

病院脇の土地に植樹をし、杜をつくる取り組み。
GOZAREが目指す「つながりの場」づくりを体現したプロジェクト。



9月 GOZARE Arts

「芸術の秋」から着想を得た毎年恒例のイベント。
障がい者アートの展示をおこない、いろいろな人が地域にいることを知ってもらう。



【獲得できた効果】

《実施者から見た効果》

- 参加しやすいイベントなので、サポーターも参加者も増えている。
- 教育、アート、防災など、地域課題解決につながるテーマのイベントが次々生まれている。
- これら様々な領域、レイヤーで活動している個人、団体をつなぐヨコの連携が深まった。

《住民・市民から見た効果》

- イベントで同じ目標を持った人と出会うことができ、その仲間で新たな取り組みが始まっている。